

パソコンができる人

さぬき市立志度中学校 校長 細川 昌宏
(国語国文学研究室 昭61年3月卒)

その昔。国語研究室の向かいに、柴田先生の研究室があった。ある日。柴田研究室の窓際に、緑色の光を放つ真新しい「コンピュータ」なるものが姿を現した。黒い画面にいくつか記号や数字を打ち込み、エンターキーを押すと、線が動いて幾何学的な模様となり、踊っていた。それが、私がPCを初めて目にした瞬間である。

興味を覚えた私は、当時、車の前半分が買えるぐらいの大金を出して、マイ・パソコンを手にした。フロッピーディスクは、二十センチ四方もの大きさ。プリンターは、作動と同時に爆音が轟くドット・インパクト型。使えるソフトは、文書作成用が一太郎。表計算は、RANK関数さえまだ備わっていないロータス1・2・3だった。

教職に就き、一時ワープロ専用機に浮気したが、ウインドウズの普及につれ、再びPC使いに戻る。一つ部品を増やす度に「相性問題」で悩まされた。それでも、ZIP、MD、HDD、スキャナーと、様々な機器を取り付けては、それが思い通りに動作するのを見て、悦に入っていた。インターネットという言葉が、やっと世の中に認知され始めた頃である。

あれから三十余年。未だに、ソケットに合わないグラフィックカードを削って装着し、うまくいけばニンヤリしている私がいる。ただし、PCのほうは、課題だった相性問題をほぼクリアし、ケータイやタブレット等、用途ごとに分化しつ

つ、インターネットの情報端末として大進化している。メインはネット上の情報であり、PCは、それを検索するための道具となっている。だから、PCの仕組みや構造を知らなくても、アプリやソフト、ブラウザをうまく使いこなせば「パソコンができる人」と呼ばれる。

莫大な資金と時間をかけ、すごい回り道をして今に至る私にしてみれば、便利になったよなあと思う。でもその一方で、いろんな失敗や回り道をした者には見えない境地があることにも気づく。

「使える人」と「直せる人」の違い、とても言おうか。そして、「使える人」で満足し、止まっている人の有り様に、若干の危うさや、コピー&ペーストにも似た軽さを感じるのだ。

やっていることは一見同じでも、その対象や内容に知識と含蓄を持ち、「なぜそうするか」まで分かっている人は、細かいところで、何かが違ってくる。「そんなことはない。使えればいいじゃないか」という意見もあるだろう。たしかに、「使える人」を作るのは大切だ。今の時代が求めているのも、そういう人かもしれない。でも、それと同時に、「直せる人」への道を示し、開きかけを与えるのも教育のあるべき姿ではないか。興味・関心を核に、「もう一步深く」突き進む情熱。その素晴らしさ・楽しさを、今の時代だからこそ、伝えていきたいものである。